

二代目清勇会会長、川口和秀氏の獄中随想「我、木石にあらず」は、俠道界の人々、獄中生活者に大きな反響を呼んだようです。「獄中随想」も大場知子さんの献身的な編集努力と共に、やはり塾長の人柄と思想の反映であります。

正直いって、私は塾長の詳しい経歴や、人となりや、その考え方のすべてを知っているわけではありません。一、二度、あいさつの手紙をやりとりしただけなのです。しかし、知らないがゆえにある種の先入

観に捉われることなく、この「我、

木石にあらず」を対象化しえる面もあるのではないのでしょうか。主観、独断、偏見といった面も当然避けられないでしょうが、私の思いのまま感想を述べることにします。

もちろん私が被告として、拘留所生活を強要されている真只中で書いている以上、これが、獄中生活の心得に、裁判闘争の参考になればという視点から発言するのは言うまでもありません。

まず「我、木石にあらず」から第一にあげられるべき思想は、現在の支配者に対する、徹底した反権力と

いう姿勢です。

当たり前ですが、人間にとって言葉ではなく、生き方、生き様がすべてです。そして、その背骨には、何をさておいても腐敗した反動的権力に対する怒り、憎悪心、闘争心が据えられねばなりません。われわれが住む、この現在の社会での人間味、人間らしきとは複雑な枝葉を除けば、どれだけその反権力の思想を強く持ち、いかに身を挺して、そうした反権力、アウトローとしての真髓を実践しているのかに尽きると言えます。

川口塾長は現在、確たる物的証拠

なるものもないまま、共犯者なるものの自由によって長期獄中生活を強要されることになりました。日本が厳正な法治国家としてあるなら、彼を犯罪者として裁くことは決してありえないことです。

塾長にしてみれば、この事件に対し、それなりに妥協したり、刑を軽くすることを摸索し、早期出獄する手段を考えることも可能だったと思います。しかし、塾長は一切そうした道は拒否、否定しました。

世間においてすら、誤りは誤りとして、事実が事実として貫いて生きることが如何に難しいものなのかは明白です。ましてや権力の意思がそのまま法となり秩序となるこの厚い堀の内側で、社会と完全に隔絶された中で、白黒を明白に、事実関係を明確にするために、歳月の流れと共にますます闘争心をかきたてて生き抜くことは、誰もが出来る簡単なことではありません。

特に今日、「疑わしきは罰せず」などという言葉はもはや死語となっており、わが国の司法は犯罪なるものを科学的に実証して裁くのではなく、マスコミを動員し、煽り作り出した世論なるものを利用して、被告の身分を、社会秩序を乱し不安をもたらす「異質」「異常」な生き方そ

獄中寄稿③

究極の絆、永遠の友情のもと

嗚呼!!

任俠ボルシエビキ

元赤軍派闘士が獄中で知ったホンモノの男と俠たち



田中義三

のものを裁く、事実上の偏見裁判、非人間を社会より抹殺し、予防検束するものとなっています。

こうした中で、私達にとつて重要なことは、それでもまだ良い面もあると妥協的に生きるのではなく、また漠然とした将来の最悪の事態を嘆くのではなく、いま現在、具体的に各自に仕掛けられた不当、不法な謀略的な裁判とどのように闘い抜くのかだといえます。

権力の不当なデッチ上げに非妥協的に闘い抜いていること、それが川口塾長の人間性を集中的に表現する核となっています。その不動の人間の核があるがゆえに、それは時には権力のあらゆる腐敗や不正を鋭く見抜く鋭利な嗅覚に、そしてまた、激しい糾弾者となれるのだという事実を知る必要があります。

その不動の人間の核は、川口塾長の場合、本文の中に書かれています。在日朝鮮、韓国人に対する優しい目、同時に被差別部落民に対する権力の横暴（天皇巡幸の際、その通りに汚い家があつてはならぬと焼き払われたという歴史）に対する怒りに確固とした基礎としています。

こうした塾長が警察の腐敗、不正にはとりわけ敏感に反応するのは当然の道理です。

兵庫県警の署長を務めれば家が一軒建つほどの餞別集め（ちなみに神奈川県警は、ビルディングだそうですが）、「ヤクザを追い出す」という美名の下で警察がパチンコ業界にのり出している金かせぎ、「総会屋締め出し」と銘打っては警察OBがその後釜に坐つて利権にむらがる行為、大蔵省の銀行局長だった輩が消費者金融の非常勤監査役に天下ってインサイダー取引をやつてあぶく銭を手にしていった事実……

こうした国家官僚の腐敗・墮落を指して、盗みや傷害では国は滅びないが、無能、悪徳官僚は国を危うくすると述べていますが、それは現下の外務省不祥事、郵政省の組織ぐるみの選挙違反等、日本の現状を的確に予告していたといえます。

かといって塾長はむやみに反発し、秩序を乱すことを旨としているわけではありません。

刑務官という職業に対しても、社会正義のために必要な仕事であり、規律維持のため、時には厳格処遇も

当然であるとしています。人間性を持った尊敬できる刑務官がいることも認めています。特に日常的に接する刑務官に対しては親しみの情と礼節をもって接してもいます。

塾長の反権力的立場が、キャンキヤンと犬が吠える闘い方ではなく、深い人間性に基礎したもののだけに更に懐の広い人間としてのスケールの大きさを感ぜさせます。

「我、木石にあらず」にあらわれている重要な思想の第二としては、権力の不正、不当に刃向うという流れにおいては共通性もありますが、現社会で抑圧され、差別され、虐げられている弱者、無権利の人々に対して、力強く励まし、積極的に支援を送る献身的な人民服務の思想です。

神戸拘留所において発生した「ガラス割り事件」での対応を見てみましょう。

ある被告が、問題児職員と他の職員との確執にまき込まれたということ。更に被告は四十日の罰を受けていた期間、その問題児職員に対し一言も口に出すことがなかったという事実関係を正確に知った上で川口塾長は、その事件に関与し毅然と問題

職員の配置換えを申請しました。そしてその結果、自らも二十五日間の懲罰を受けることになりました。

人によっては、わが身に加えられたい理不尽さに対しても反抗しえない人がいます。もし反抗したとしてもそれは当然のことです。しかし、自分が関係する必要もなく黙って見過ごせることであっても、他人にふりかかった理不尽さに我慢ならず、敢えて身を乗り出せる人であつてこそ、いわば真の人間らしさなのであり、正に義侠の人といえるのではないのでしょうか。金のため、地位のため、自分の欲望のためには平気で人を犠牲にし、畏に陥し入れることが珍しくもない今の時代に、拘留所に監禁されながらも、他の被告の状況を鋭く観察し、掟と信義を守り抜く者のためには一肌も二肌もぬいでいく塾長のその姿に心が揺さぶられない人はいないことでしょう。

その他にも冤罪裁判を闘っている人、拘留所ひいては刑務所で裁判の不正、不当を訴えている人々に様々な救いの手を差し伸べていることは、多くの人が知るところです。

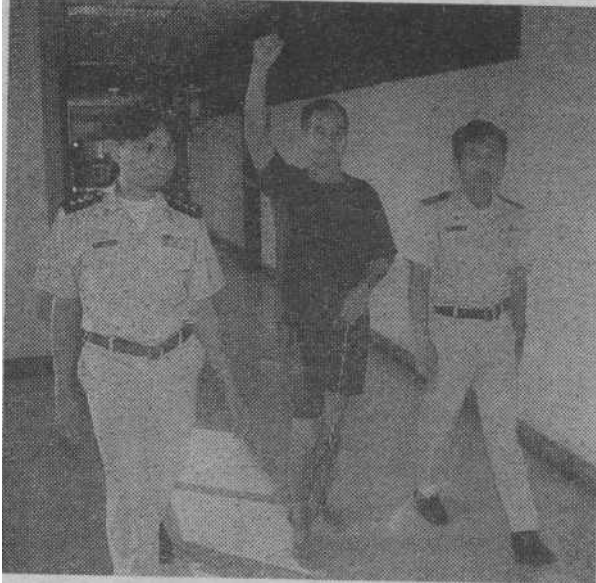
「我、木石にあらず」から読みとることが出来る思想の第三は、人権を全く無視した前近代的な拘留所、刑務所の実情を告発し、自ら先頭に立

●田中義三——一九四九年青森県三沢市に生まれる。一九七〇年三月、日航機「よど号」をハイジャックして北鮮に。一九九六年三月、「ニセドル」事件でタイ当局に拘束されて裁判。その後日本に送還され、本年二月、ハイジャック事件等で懲役十二年の判決を受ける。現在、東京拘留所在監中。

ち待遇の改善のため粘り強い闘いに
取り組んだことです。

直観や推察にだけ頼ることなく塾
長は、各拘留所、刑務所に築いた
「独自のネットワーク」をふるに活
用し、客観的事実、状況を正確に調
べあげています。

わが国の刑務所、拘留所の人権侵
害の実態は間違いなく先進国中で最
悪といえます。人間性という側面か
ら言えばタイの刑務所よりも数段劣
っているといえます。(これは私が実
際に体験したのですから明確です)
刑務所の作業賞与金、未決の請願作
業の労賃は奴隷制賃金といえるもの



タイで拘留中、法廷に向かう著者／撮影・村上昭浩

う概念は存在して
おらず、監獄法が
制定された明治時
代の人権感覚がそ
のまま残っている
ところでは、わか
りやすく言えば、
人間のような容姿
をもった「犯罪者
動物」が監禁さ
れ、飼育されてい
るところだとい
うことです。

「扉は重くてもま
ず叩かねば開かな
い。人権上の大き

で、皆さんもフランスの状況と比べ
て啞然としたと思います。

今日、日本の拘留所、刑務所に
は、客観的立場(第三者として)で
問題や事件を科学的に認定する人権
機関は全く存在しません。権力者が
不当、不正を覆いかくすための権力
者の実務的機構が形式的に存在する
ことはあってもです。ただただ当局
の身勝手な統治に便利な尊守事項
や、刑務官のその日の気分による判
断、決心が、そのまま法となり秩序
となって大手をふってまかり通っ
ています。被告の拘留所での待遇や受
刑者の日常生活には、人権などとい

な問題であり、後に続く者達への既
得権となるのだから」という塾長の
切々たる訴えは、深い洞察と、科学
的な根拠に基づき、獄中生活者のこ
とを思っただけの発言であり、説得
力があります。また各種人権団体組
織との連絡のとり方や、交流の進め
方など具体的方途にも言及していま
す。

監獄や拘留所の待遇改善は決して
誰かが解決してくれることはありません
ず、どこまでも私達自身が自らの闘
いによって、粘り強く、解決してい
かねばならない問題であるというこ
とをどうか皆様のひとり、ひとりが
しっかりと自覚してもらいたいと思
います。

「獄道」に在りては、右翼、左翼、
ヤクザ等、思想、信条の差を越えて
呉越同舟すべきだと強調しています
が、それにも心より共鳴するもので
す。

8

では次に、川口塾長のこうした反
権力の背骨と豊かな人間味はどのよ
うにして生まれ、形成されてきたの
かということですが、私なりの推察
を述べたいと思います。

その原点として浮かびあがってく
る事実、学生時代、同じ悪さをし

ても貧乏人の「ガキ」なら叱られ殴
られるが、社会的地位があり恵まれ
た家庭の「子息」なら配慮されると
いう現代社会の縮図とも言える理不
尽極まりない生活実体験、その時の
不満、怒りが塾長の骨の髄にまで深
くしみ込んでいるように思います。
子供心を深く完全に傷つけた「怨
念」を一過性の物語として終わらせ
ることなく、心の中にしっかりと据
え、それがその後の生き方に強く投
影されてきたといえます。

また、それと共に傷つけられた人
に特有な人間心理が一方で細やかな
観察力、洞察力、敏感な感受性とも
なっていることが、川口和秀という
人物を分析していく上で重要な人間
的要素ともいえます。

「我、木石にあらず」の至るところ
にあらわれる、鳩、スズメ、カラ
ス、ジュウシマツ、ブンチョウ、コ
オロギ…等々との心のふれあい、そ
れそれに対する実に細やかな観察力
は驚くべきものです。私のこの東拘
の窓辺に鳩、カラス、スズメ等が訪
れ戯れている時があるのですが、一
年を有に過ぎても私には鳩それぞれ
を見分けることができずにいます。
ましてや、カラス、スズメに至って
はただだいるという感覚しかありませ
ん。一羽、一羽の姿、形、動き、感

情の分析に至っては全くお手あげです。それが塾長は何故できるのか？それは、何よりも弱き者、弱き立場にある者を愛でる心、この世に存在するすべての生き物にその価値を見い出そうとする心の暖かき、豊かさにあふれているからです。

また時として、薄氷のように繊細なその心は、新聞の「声」の欄の投書に対する敏感な反応としてもあらわれます。

貧しくて学校に費用を持っていくことができないのに、ランドセルに先生から「集金」の紙を張らされた生徒のことに涙するある公務員の「投書」をとりあげていますが、そこには、同じともいえないまでも、塾長が青少年期にある種同様な原体験をした時の感情が、今の今も心の中でうずいていることを示す何よりの証左と言えるでしょう。新聞といえば普通、政治、社会、経済、スポーツなどといった記事のみに流れがちなのですが、塾長の目は庶民の声、切実な訴えが反映されることもある「声」の欄にでもすばやく反応

しています。私もあらためて新聞の読み方を学んだ次第です。

「我、木石にあらず」から読みとるべき重要な内容のひとつは、自分にはどこまでも厳しく、他人に対しては限りなく優しく接する姿勢ではないでしょうか。

96年、いわゆる日本赤軍の被告として東京拘置所に勾留されていた丸岡修氏が急性肺炎（呼吸停止、多臓器不全）で重態に陥った折、川口塾長は、じつに一カ月以上も毎日、回復祈願の写経をされたといえます。義理も人情も地に落ちたといわれる今の世の中で、一度も直接会ったことのない人のために、それほどの思いを込め、愛情をふりそそいだ話は、私の心の奥にしみ込んできます。

人間一般的に言えるのは、自分に甘く、他人に厳しくなる傾向です。塾長が長期の拘置所生活を通じ総括している言葉として感動するのは、「自分を眺める時間を得たことで自分をそれなり客観視できるようになったと思うし、他の人のことが

獄中寄稿 究極の絆、永遠の友情のもと
嗚呼!!
任侠ボルシエビキ



よく見えるようになった」との言葉です。人間、自分を知るといのは決して簡単ではありません。常に自己を美化し、正当化していく衝動にかられるのが人間なのですから……。自分の状態を自分が正確に把握することは、動物は本能による行動、感情にとらわれた行動を人間の理性で抑制する最大の武器なのです。人間として、恥も外聞もない行動というのは結局自分を理性で統制しえないことから生じた結果なのです。人間が動物と異なるのは、恥や外聞、メンツ、プライドを気にすることにはずです。冷静に自分の理性を尺度に自分の言動をふりかえり、必要であれば反省し、常に自己調節していくことは、実に人間のみがなしうることなのです。

天道浩太郎氏の再審決定に対して川口塾長は、「自分を裏切り、主犯者の汚名を着せんとした共犯者を許したからこそ、再審開始の道が切り開かれた」と述べながら、「他を恨むことは、人生に於いて、何の解決も与えてくれない」と断言しています。至極の光を放つ言葉です。更に「他人に対してこの人の長所は好きだが短所は嫌いだな」と思っているうち、信念は行き届かない。長所も短所も含めて、全て信じていることが信

念となる」と述べています。そして、この言葉通り、塾長自信が見事に実践しています。共犯者の態度に對し花岡氏が敢えて、許せないと言っています。これは一般的に言えば誰でもそう考え、判断しても当然とも言えることなのです。しかし塾長は、自分に突っ張って来た若者に対してすら男気を感じ許し包摂しています。まさにそこに人間としてのスケールの大きき、肝胆の太さが如実に示されています。

人間も感情の動物である以上、裏切者とも言える輩に憎しみや怒りの感情が生れないはずがありません。ではなぜ塾長はその感情をおし殺すことができたのかそれが重要なことです。かつて舎弟に受け入れ、同じ狭道の道を行っていた者である以上、その人の否定面、問題点に対しても上にいた自分が自身のいたらなさ、欠陥として、自分が責任をとるべきだと考えるがゆえに「許す」という言葉が発せられるのではないのか、私はそう思えるのです。

「我、木石にあらず」から是非学ぶべきだと思うことの次は、人間の生の目標とは、絶ゆまず人間味を備えた人間として成長していくために努力することであり、そのために塾長が比類なき学習意欲をもって常にど

99



二代目清勇会川口和秀会長が著した獄中隨想録

んな状況の下でも生涯学習を実践していることです。
 「無学なことは恥ずかしいことではない。向学心を失くしたり、努力を怠ることの方が恥ずかしいと思う」と述べています。塾長は中卒であると語っていますが、随想文にちりばめられている内容は相当に覚悟しての旺盛な学習意欲なしにとうてい書くことのできない造詣の深い内容のものであります。獄道生活の中で硬筆の通信教育受けたといえます。人間はどの学校を出たのかという学歴一般よ

我、 獄中隨想 木石にあらず

り、自身がどれだけ必死に学ぶのかにかかっているということを改めて確信させてくれます。有象無象の超有名大学出身者や外務省の官僚どもとは是非見比べて下さい。どのような本にもそれぞれ学ぶものがあります。塾長の経験を見れば、日本や中国の古典は特に東洋の日本の精神や心を知り育んでいくために格別重要な気がします。
 学習のみならず健康管理のための塾長の鍛錬もすさまじいものです。それは肉体の鍛錬以前に明らかに意志力を鍛えているといえます。三十分間の運動時間にランニング百回、縄跳び千回、腕立て百回、逆立ち百秒という超人的スケジュールをこなしていくその姿に、並々ならぬ意志の強さを感じることが出来ます。
 「我、木石にあらず」の至る所に思

わず吹き出してしまいうーモアがあります。まさにそれは塾長の先天的なものでしょうし、数々の試練を越えてきた秘決のひとつでしょう。
 うーモアは頭の回転の早さ鋭さ、人の心を読みとる機敏さとも重なるものです。一般社会でも生きていく上で様々な風雪に見舞われる以上楽天的な気風は大切ですが、特に拘留所、刑務所での生活に欠かせないのがこのうーモアあふれる楽天性なのです。
 裁判を行いながらの拘留所生活は日常的に権力と対峙する日々である以上、ただニコニコしてどんなことをされても笑って受けながしていたらそれはバカとしか言いようがありません。状況によっては怒り抗議することが必要です。それすら出来ない我慢していたらストレスがたまるのは自明なこと。そうした原則を守りながらも、しかし、どこまでも楽天的に生活することが重要です。
 私が朝鮮で知った言葉に「空が崩れ落ちてはい出る穴がある」というのがあります。ハイジャックによる政治亡命、アメリカの陰謀によって強制されたタイでの「ニセドル」冤罪裁判、そして帰国して後の現在までの三十年越しの裁判闘争と、人

生の大半をきわめて奇遇な運命にほんろうされている私が、積み重なる難関をのり越えて来られたのは、多くの皆様の暖かい支持支援もありますが、法を犯すことはあっても人間としての生き方において非道の道を歩んだことがないという確信であり、いつか必ずや今の政治や社会が根本的に正される時がやって来るという信念を持ち得るからです。この「空が崩れ落ちてはい出る穴がある」というのは、今の裁判、拘留所生活での支えとなっていますが、今後更に塾長が述べている「器量の分だけ心が揺れる」というのも座右の銘にしていきたいと思えます。
 極道者、左翼、右翼という壁をつくらず、多くの獄中生活者の交流詩であって欲しいと川口塾長が発起した「獄中塾通信」は、日々多くの人々の心を掴み、心の安らぎと潤いを与え、多くの裁判獄中生活者の支えとなっています。将来的には更に待遇改善の闘いを鼓舞していくでしょうし、人生の目標と価値を問いたです親しい友として発展していくと確信しています。
 私もこの「獄中塾通信」のために成しうる最大限の努力を傾けていく覚悟です。
 〈以下次号に〉